

## 『鈴鹿の物語』 大東急記念文庫蔵本について

安 藤 秀 幸

### はじめに

室町物語（広義の御伽草子）には四百編を越える作品が知られている。そして多くの場合、その一々の作品に、大小様々な差異を含む諸本がある。小さな差異は単なる表記揺れや誤写に基づくものであるが、大きな差異には、内容そのものに変化を加えた、いわば改作と言うべきものもある。もちろん、伝本の数が多ければ差異の幅も大きくなるのが通例であり、それは多数の伝本が知られる『熊野の本地』や『酒吞童子』における本文の多様性に表れている。また、伝本数が必ずしも多くはなくとも、時には大きな差異が現れることもある。『鈴鹿の物語』（『田村の草子』）における大東急記念文庫蔵本（題簽

「す、か」。以下「東急本」と略す）がそれである。

『鈴鹿の物語』は俊仁・俊宗（田村）父子二代による数々の怪物退治を描く物語である。俊仁が藤原利仁を、田村が坂上田村麻呂をモデルに造形されていることや、物語後半で鈴鹿御前（立烏帽子）という天女が登場し田村をしのぐ存在感を見せること、様々な説話を背景にして作られた種々のエピソードなど、興味の尽きない作品である。もともと、文芸作品としての巧拙を言うならば、力作ではあるものの、内容過多であり、必ずしも成功作とは言いがたい。

この作品には写本七種と流布本系諸本が知られる。それらの中の一本が、先に挙げた東急本である。江戸初期の豪華な奈良絵本であるが、その本文は『鈴鹿の物語』

諸本の中で際立った独自性を持つ。その独自性は、本文のどの部分を切り取っても他本との同文的一致をほとんど見出し難いほどであり、脚色や挿入説話にも著しい特色がある。

筆者はこれまでに『鈴鹿の物語』を主題としていくつかの論考を発表したが、その際、東急本にはほとんど触れずにきた。それはこの本文が『鈴鹿の物語』としては明らかに後出の本文であり、また、特異性があまりにも強かったからである。つまり、室町時代の物語としての『鈴鹿の物語』を論じるにあたっては、東急本は考察対象から外した方が好都合であった。しかしながら、特異な本文であるのならば、それがどのようにに特異なのかは明らかにしておく必要がある。本稿は東急本の特色を概観し、その傾向を把握しようとするものである。

なお、本稿では専ら本文について述べ、絵のことについては触れない。東急本の絵は本文によく対応していることから、本文内容に即して描かれたものと推定される。それゆえ、同本の理解のためには、絵よりもまず本文について論じる必要があると考えられるためである。

## 一 諸本における東急本

東急本について述べる前に、『鈴鹿の物語』の諸本について略述する。既知の本文は次の八種である。<sup>(1)</sup>

- (一) 高野本……高野辰之旧蔵、慶応大学図書館蔵。室町後期写本。略本。『大成・七』所収。
- (二) 小野本……小野幸氏蔵。室町後期写本。後半(二冊本の下巻か)のみ存。零本。「田村の草子」として『大成・補遺二』所収。
- (三) 万治本……慶応大学図書館蔵。万治三年写本。『神道物語集』<sup>(2)</sup>所収。
- (四) 吉田本……天理図書館吉田文庫蔵。江戸初期写本。前半(唐土攻め譚)の途中まで存。零本。翻刻・影印なし。
- (五) 國學院本……國學院大學図書館蔵。奈良絵本。寛文・延宝頃写本。山本岳史氏「國學院大學図書館所蔵奈良絵本『田村の草子』解題と翻刻」<sup>(3)</sup>所収。
- (六) 天理写本<sup>(4)</sup>……天理図書館蔵。寛文・元禄頃写本。元は奈良絵本か。『大成・七』所収。
- (七) 流布本……寛永頃古活字版(二種)およびその派

生本（整板本・奈良絵本などを含む）。物語後半を大幅に改作。「田村の草子」として『大成・九』所収。

（八）東急本……大東急記念文庫蔵。奈良絵本。江戸初期写本。翻刻は横山重氏編『室町時代物語集・一』（大岡山書店）、影印は『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世篇 物語草子Ⅰ』<sup>(5)</sup>所収。

\*桜井本……桜井慶二郎氏蔵。寛永四年奥書写本。詳細不明。

右の内、（二）～（六）は室町時代の本文を色濃く残すものと考えられることから「古本系」と総称することとする。古本系はその本文の特徴から三類に大別できる。（一）・（二）からなるⅠ類、（三）・（四）・（五）からなるⅡ類、（六）のⅢ類である。この内、Ⅲ類はⅠ類の前半（金飛礫退治譚まで）と、Ⅱ類の後半（立烏帽子討伐以降）からなる取り合わせ本である。また、流布本は物語後半の展開が古本系とは大きく異なるものの、それ以外の類似点によって、古本系Ⅱ類から派生したものと推測される<sup>(6)</sup>。

今回取り上げる東急本は、右のいずれとも大きく異なる。それがどのように異なるのかは後に改めて述べるが、

他本との類縁関係の可能性について先に触れておく。

まず、東急本が古本系と流布本のどちらに近いのかについて検討する。先の分類において、古本系と流布本を分けるのは物語後半の展開である。古本系においては、後半の主人公である田村（俊宗）は、奈良坂の金飛礫<sup>かなつせ</sup>という妖怪を退治した後、鈴鹿山の立烏帽子（鈴鹿御前）という女の討伐に向かう。ところが田村は鈴鹿御前に敗れ、彼女と結婚する。その後、紆余曲折を経つつも、鈴鹿と共に近江蒲生の悪鬼高丸を討ち、次いで陸奥霧山嶽の悪鬼大嶽を退治する。これに対して流布本では、金飛礫退治の次に鈴鹿、山の大嶽丸を退治することになる。その際、田村は天女鈴鹿御前の導きによってこれを成し遂げ（鈴鹿御前とは対立しない）、その後、高丸を討ち、その後、霧山嶽に復活した大嶽丸を再び討つ。この二度にわたる大嶽退治は、坂上田村麻呂が「勢州鈴鹿の悪魔を鎮め」たとする謡曲『田村』<sup>(7)</sup>を取り込んだことによるものであり、謡曲の撰取により作品構成そのものが変化したことを示している<sup>(8)</sup>。

内容構成における右の点について、東急本を見てみると、怪物は金丸入道・立烏帽子・戸隠山の鬼・立山の鬼、という順序で登場し、一見すると古本系とも流布本とも

異なる。しかし金丸は出現場所もその描写も、明らかに他本における金飛礫に相当し、その名前を人名らしく変えたものと考えられる。戸隠山の鬼・立山の鬼は、固有の名もなく、出現場所も他本には見られない地名であるが、その退治譚の描写から見れば、他本における高丸・大嶽に相当するものである。となれば、東急本における怪物退治の順序そのものは古本系と同一ということになる（表参照）。加えて、立烏帽子との戦いを描くことも古本系と共通する。従って、東急本は古本系からの派生であり、流布本と直接の類縁関係はないと推定される。

〈表〉 物語後半の討伐対象とその舞台

古本系	流布本	東急本
金飛礫 (奈良坂)	金飛礫 (奈良坂)	金丸入道 (奈良坂)
立烏帽子 (鈴鹿山)	大嶽 (鈴鹿山)	立烏帽子 (鈴鹿山)
高丸 (蒲生↓海上)	高丸 (蒲生↓海上)	戸隠山の鬼 (戸隠↓海上)
大嶽 (霧山嶽)	大嶽 (霧山嶽)	立山の鬼

では、東急本が古本系からの派生であるなら、その派生元はⅠⅢ類のいずれであろうか。それを検討するにあたって、東急本が本文を全面的に改めていることが障害となる。というのも、ⅠⅢ類の整理は概ね文飾の相違に基づくもので、本文の具体的な比較校合の他に確実な分類方法がなく、全面的改変を経た東急本はそれが不可能だからである。その中で比較が可能な箇所を探してみると、次の二点がかるうじて挙げられる。

一つ目は、「みなれ川」の所在地である。物語序盤、日りう（俊仁の幼名）はみなれ川の大蛇を退治する。この川の所在地は、高野本（Ⅰ類・天理写本（前半はⅠ類と同系）においては武蔵国である。一方、Ⅱ類の万治本・吉田本・國學院本では近江国となっている<sup>9)</sup>。この相違は（取り合わせ本の存在を除外すれば）簡便な分類指標となり得よう。これについて東急本を見ると、「あふみのくに、みなれ川」<sup>10)</sup>とあり、Ⅱ類本と同様である。

二つ目は、俊仁が天狗の助言を求めてどこへ行くかである。これも同じく物語前半であるが、俊仁は行方不明になった妻を探して天狗に助言を請う。高野本・天理写本では、まず愛宕山の天狗教光坊を訪ね、次いで東山の三郎坊を訪ねて助言を得る。一方、Ⅱ類本では三郎坊を

訪ねる件がなく、教光坊から助言を受ける。この点においても東急本はⅡ類本と同様である。これらから見て、東急本はどちらかと言えばⅡ類と近い本文であろうかと思われる。

ただし、この天狗の助言から続く箇所の問題がある。

天狗は、俊仁の妻は鬼に取られたと語り、子細を「帰ridoにある伏木に聞け」と言う。俊仁が伏木に尋ねると、伏木は大蛇の姿になって（東急本では木のうろから蛇が現れ）、正体を明かす。その正体は、高野本・天理写本では俊仁の母、Ⅱ類本では俊仁のおばであった。<sup>①</sup>先ほどの推測によれば東急本でも俊仁のおばが登場すべきところであるが、東急本に描かれるのは俊仁の母であり、Ⅱ類本とは異なっている。<sup>②</sup>

東急本と他本との類縁関係については、比較できる箇所がこのように少ない上、その比較箇所が物語の前半に集中しており、なおかつ矛盾も伴うのであるが、強いて言えばⅡ類本に近縁かという程度の指摘に留めざるを得ない。その上で、他本（特に古本系諸本）との相違について、次節以降で検討する。

## 二 東急本と他本の相違

『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世篇 物語草子Ⅰ』の解題（柴田芳成氏執筆）には、東急本と他本の相違点についての要約がある。解題という形式の都合上であろう、これは東急本を中心に据えたもので、東急本に対して他本がどのように異なるかを示すものであった。しかし、諸本の中で特殊なのは他本ではなく東急本である。ならば、東急本の特殊性を明らかにするためには、一般的な姿の本文、すなわち古本系諸本の記述を中心に据え、それに対する東急本の相違点を示す必要がある。とはいえ、ここで全ての相違点を列挙するとあまりにも冗長になるため、柴田氏の解題に倣って主要な相違点を八項目に絞り、ストーリーの順に挙げると次のごとくである。なお、以降の比較において「他本」は古本系全般を指し、立烏帽子討伐・大嶽退治を除いては流布本もそこに含むものとする。

① 他本では、主人公は俊重―俊祐―俊仁―俊宗（田村）という系譜であるが、東急本では俊重―俊仁―俊宗となっており、他本における俊祐は全て俊重の事跡として描かれる。また、俊宗のことを田村（田

村殿・田村の將軍）と呼ばない。

② 他本では、日りう（俊仁）はみなれ川の大蛇と戦い、これを討ち取る。東急本では「神として祀る」と言

って大蛇を説得して首を取り、龍王権現として祀る。

③ 他本では、俊仁の落胤であるふせり（俊宗）と母の別れは簡略に描かれ、母はその後登場しない。東急本では別れの悲しみが描かれ、また、成人した俊宗が里帰りして母を養う描写がある。

④ 他本では、俊仁は名を後代に残すために唐土攻めを行い、敗死する。東急本では、俊仁は百二十歳で往生する。また、唐土攻めではなく匈奴の襲来があり、それを俊宗が撃退する。

⑤ 他本では、田村（俊宗）と鈴鹿の離別の後に高丸という鬼が出現する。東急本では戸隠山の鬼（高丸に相当）が先に出現し、そのことが俊宗・鈴鹿の離別を招く。

⑥ 田村（俊宗）の龍馬入手は、他本では痩せ馬購入と育成によるのに対し、東急本では駿馬が内裏に突如出現する。

⑦ 他本における陸奥国霧山嶽の鬼・大嶽が、東急本では越中立山の鬼神として登場する。また、この鬼の

妻が鈴鹿の母であるとされる。

⑧ 他本における田村・鈴鹿の死と蘇生に関するくだり全体が、東急本にはない。

これらの他にも、俊重が妻との出会いに際して『伊勢物語』第六段および第一四段を想起するなど、説話の単純な増補がいくらか見られる。

### 三 東急本の改作方針

前節に挙げた東急本の特色は、あくまでも物語の展開に関わる部分に絞ったものである。しかし、古本系と東急本の相違は脚色の仕方においても著しい。そのため、先のごとくに列挙しただけでは、東急本の特異性の一端を知ることではできても、その傾向や改変の意図を汲むことは不可能である。それらを検討するためには、やはり全編を通じた比較によって改変箇所を概観する必要がある。

古本系との粗筋の対照表（付表）に基づいて東急本の改変や増補を概観すると、いくつかの傾向が見受けられる。それは概ね次のようにまとめることができるものである（□内の数字は付表の粗筋に対応する）<sup>13</sup>。

## (一) 挿入説話の増補

古本系『鈴鹿の物語』において、故事の引用や説話の挿入はほとんどない。わずかな例としては、ふせりが母を問い詰める場面<sup>12</sup>で、釈迦が浄飯王と摩耶夫人の間に生まれたという故事を引く件がろうじて指摘できる程度である。その他の説話的要素は換骨奪胎を経て物語内部に組み込まれており、挿入説話と呼べる姿ではなくなっている。これに対して東急本では、俊重と女の出会いの場面<sup>2</sup>において、遍昭の女郎花説話や『伊勢物語』第六段および第一四段の言及と和歌の引用があり、俊仁誕生<sup>3</sup>においては神農・范増の出生説話と龍女成仏譚が触れられている。また、駿馬が宮中に突如出現したことを承けての公卿僉議<sup>4</sup>においては名馬説話が披露される。このように、古本系にはない説話が複数増補されている。しかしながら、これらのように挿入説話であることが明らかなのは特に物語序盤に集中しており、作中に説話をちりばめるといふ意志はさほど強いものではない。

室町物語類において、先行する本文を踏まえてそれを大幅に改変し、多数の説話を増補するものとして、『酒吞童子』諸本における慶應義塾図書館蔵本（『室町時代物

語大成・三』所収）が挙げられる。このような説話の増補は、室町物語の近世化における特色の一つと見てよからう。

## (二) 心情描写の増補

古本系『鈴鹿の物語』は登場人物の心情描写にあまり熱心ではない。その極端な例は、俊仁の落胤であるふせりが母の元を去って都へ上らんとする場面<sup>12</sup>である。

ふせりは自分には父がないことに気づき、母を問い詰める。母は父の存在を隠そうとするが、形見の鎭矢を見せ、ついには「俊人の将軍こそ汝が父」と明かす。するとふせりは、

大に悦て、母に、「此七年か間、そい奉りて、名残おしくは候へとも、父と云人のなつかしくて、今は暇申て、命有は必、六年にまいらん」とて、七歳と申す七月下旬の比、田村の郷を立出で

と、親子の別れは淡々と終わる。一方、東急本はどうか。ふせりとの……「さてはうたかふところなし。これ

（引用者注、形見の鎭矢）をしるしに、みやこへたつねのほらむ」とのたまへは、は、はかなしみて、「いまたしとけなくして、はる／＼のほり給はん事、



みちのほと、いか、してかゆき給ふへき。いまずこし、おとなしくなりてのほり給へ」ときこゆれば、

「ち、のありかをきくよりも、一日もはやくあひたてまつらんとおもふなり。七さいまでそたて給ひし御なこりはつきせすはんへれとも、やかてかへり申へし」とて、とりつき給ひしは、のそてをふりきりて、た、一人かちはたしにて、はしりいて給ふ。

は、はかなしさに、あとにつきてはしりいて、「それと、めてたへや、人く」とて、もたえこかれてかなしめと、あとをもちへりみず、二月の下の十日にたむらのかうをたちいて、しらぬ野山におもむき給ふ、心のうちこそあはれなれ。

万治本には漢字が多いことを差し引いても、優に三倍以上の文章量である。このような心情描写の増補は、俊重（他本における俊祐）とその妻の出会い<sup>15</sup>や、ふせりと俊仁の出会い<sup>16</sup>に際しても見られる。前項と並んで、東急本における描写増補の一角をなすものと言えよう。

### (三) 軍記の影響

『鈴鹿の物語』は怪物退治譚を何度も描くが、そこでの戦闘描写そのものは淡泊である。たとえば悪路王の戦

いでは、まず鬼との眼光競べがあり、続いて俊仁が剣を投げる。

俊人、剣刀剣<sup>（ママ）</sup>をぬきて、鬼十人か中にそ、なけられけり。剣、まいあかりて、十人の鬼の首を討落す。

これに比べると、東急本の戦闘描写は軍記物語を強く意識した描写となっている。それは、立山での「白山の夜叉鬼神」との戦い<sup>17</sup>における次の描写を挙げるだけでも明らかである。

としむね、きしんにとりひしかれ、下に成給ひて、あやうく見えけるか、小たちをぬいて、あけさまに二刀さして、とつてかへして上になり、くひをか、んとし給へは、きしんかなはしとおもひけん、てをあはせて、「いのちをたすけ給へ、けふより日本のあくきをしつむへし」と、かうさんす。

また、軍勢の働きを描くことも東急本の特徴として挙げられる。と言うのも、他本では主人公が実質的に一人で怪物退治を成し遂げており、軍勢の活躍はほとんど描かれないのである。具体的に言えば、主人公と共に出陣した軍勢は途中で帰洛を命じられるか（立烏帽子搜索<sup>17</sup>・高丸退治<sup>22</sup>）、あっけなく壊滅するか（みなれ川大蛇退治<sup>5</sup>）、そうでなくとも何ら目立った働きを見せない（唐土



攻め⑮・金飛礫退治⑯)。これに対して東急本では、戦評定の描写もあれば、軍勢が敵城を攻め破る描写もある。これらもまた、軍記における合戦描写を意識したものと見てよい。

合戦そのものの描写以外にも、東急本の軍記志向は指摘できる。たとえば、匈奴を迎え撃つに際して⑮、次のような議論が行われる。

としむねのさふらひに、たはらの源五かねまさといふものあり。ちゝのときより、度々のかうみやうしたる、かうらうのものなれは、すゝみ出て申やう、「さためて、いこくのくんひやうは、ふないくさをこのむらん。日本人はふねにてうれんなくして、かけ引しさいなるまし。しはらく、はかたのはまにしやうくはくをかまへ、たてこもりてたゝかひ給は、けうとのたいち、うたかひあるまし」とそ申ける。としむね、もとよりわかむしやのきはやにて、もつてのほかにきをそんし、「日本の大しやうほとものか、てきのよするをまちて、ひらしやうに、たてこもるといふ事やあるへき。いつくにても、ゆきあはん所まではせむかつて、たゝいくさにたいらくへし。いさや、つはもの」とけちすれは……

血気盛んな若武者が慎重策を一蹴し、攻撃を強行して勝利することは、『平家物語』巻一一・逆櫓における源義経と梶原景時の口論を下敷きにしたものであらう。また、前項でも触れたが、宮中に現れた駿馬の扱いについて公卿僉議があり⑭、中国の故事を引いて一旦は吉例とされるも、結局は必ずしも吉例ならずと結論される件は『太平記』巻一三・龍馬進奏事に基づくものと見てよい。このように、東急本における軍記の影響は著しいものがある。

なお、軍記ではないが、『酒吞童子』の影響と考えられる描写もある。『鈴鹿の物語』は元々『酒吞童子』を利用したと思しき構成・描写を含むが、東急本はそこへさらに『酒吞童子』の要素を足している。具体的には次の三要素が指摘できる。(イ)怪物出現に際して公卿僉議が開かれ、高僧の不在ゆえに武士による退治が必要であると結論されること(みなれ川大蛇退治④)。(ロ)異境が洞窟の先にあること(立烏帽子搜索⑦)。(ハ)鬼の城にてもてなしを受け、主が泥酔し、その隙に鬼神退治の内談をすること(立山鬼神退治⑯)。以上の三つである。特に立山の鬼神退治は、先に首魁の鬼を討ち、続いて多くの鬼と戦い、その際に主人公と鬼の格闘が描かれること

も『酒吞童子』（サントリ―本系）と同様であり、これも影響と言えようか。

#### （四） 時代思潮の反映

『鈴鹿の物語』は室町時代後期に成ったとされる。文  
明一八年（一四八六）頃の文書「坂上田村麻呂伝勘文案」<sup>19</sup>  
に本作からの引用文が見られることから、それ以前の成  
立であることは疑いえないが、恐らくは一五世紀半ば頃  
の成立と見て良からうか。それは朝廷や幕府の権威がい  
よいよ失墜し、社会の秩序が流動化する時代であった。  
その後、戦国時代を経て全国統一が成り、江戸時代に入  
ると社会秩序は再び固定化する。『鈴鹿の物語』もまた、  
その影響を蒙っている。著しい例は、天皇の権威に対す  
る挑戦的な記述の扱いである。

古本系において、鈴鹿（立烏帽子）は都への年貢御物  
を奪う存在として登場し、田村がその討伐に向かう<sup>17</sup>。  
ところが田村は鈴鹿に敗れ、二人は結婚する<sup>18</sup>。その後、  
田村は鈴鹿を騙して朝廷に差し出すことを画策するも看  
破され、鈴鹿はみずから内裏に出向く<sup>19</sup>。その際、彼女  
は帝に対して次のように述べる。

童かすこしたる事は何事か候へき。君は十善の位と

こそ思召候へとも、下界の賤御身なり。童、甲斐な  
きやうなれとも、さすがに上界の天人なり。戒力の  
たるによつて、手をいたしてとらねとも、年貢御物  
のはつをは、とりのことくに飛つれて、鈴鹿か本に  
来る成。誠に取候は、是参候時、打搦させ給へ。

このように古本系での鈴鹿は年貢御物の件を堂々と正  
当化し、天女は帝に優る地位であると主張する。

一方、東急本では参内に至る理由付けが異なるものの、  
俊宗との休戦・和解の際には「けふより、あくしすへか  
らす」と述べており<sup>18</sup>、鈴鹿の行為が「悪事」であると  
明記されている。つまり、東急本においては、たとえ天  
女であろうとも朝廷の秩序を乱すことは「悪事」である、  
という観念が示されているのである。また、他本におけ  
る大嶽が天皇を愚弄する発言をするのに対し<sup>27</sup>、東急本  
にそのような文言がないことも、これと同様の意図によ  
る改変であろう。

なお、先ほど触れた参内場面では、古本系諸本におい  
ては田村がその裏切りにより鈴鹿の信頼を失い、いわば  
鈴鹿に捨てられる形で二人の婚姻関係が一時破綻する。  
これに対し、東急本では帝が俊宗に「けふより、みやこ  
にと、まり、国／＼のらんをしつめてえさせよ」と求め、

俊宗はそれに応じて鈴鹿に暇乞いをし、鈴鹿は納得して去る。これは、離婚が（たとえ形式上のものではあれ）夫の専権であるとする近世の觀念に従う改変であると判断できる。

また、祝言性を強調することも東急本の特徴と言え、それは主人公が悲劇的な死を迎えないという点に顕著である。具体的には、他本における俊仁は唐土攻めで討ち死にし<sup>15</sup>、また、俊宗は鈴鹿が定業で死んだことを悲しむあまり思い死にする<sup>29</sup>。このような死は、東急本には描かれない。

まず、俊仁の死について確認すると、古本系（および流布本）では、俊仁は落胤であるふせりと出会い<sup>13</sup>、後継者を得たことで安堵し、後代に名を残さんと唐土攻めを思い立つ<sup>15</sup>。俊仁は唐土側の修法により出現した不動明王らと遭遇し、海上で戦いになる。その最中、俊仁に力を与えていた多聞天が不動の持ちかけた取引に応じてしまい、加護を失った俊仁は奮戦空しく不動に討たれ、唐土攻めも失敗に終わる。

これに対して東急本では、俊仁はふせりが成人し「朝日の將軍田村の俊宗」となるのを見届け、  
ち、としひとは、あんきよし給ひて、ほんりやうな

れは、ゑちせんのかいのこほりにくたりて、すみ給ふ。しよこくのさふらひ、一とせかはりに、ひはんたうはんをつとめ、ふつき日ころに百はいして、あかしくらし給ふか、百武十年のよはひをたもち、わうしやうをとけ給ふとかや。

と、平穩な老後と大往生が語られる。これは頼みの多聞天に見捨てられて敗死するという他本における最期とはかけ離れたものである。加えて、この後には匈奴襲来とその撃退が描かれ、次代の俊宗が初陣を飾る。

次に俊宗の死について見ると、これも他本とは大きく異なる。他本では大嶽退治後に鈴鹿・田村（俊宗）の死と蘇生が描かれるのであるが、東急本ではその全体が削除されているのである。これについても少し詳しく見ると、他本では、大嶽退治直後<sup>28</sup>、鈴鹿は定業による死が自分に迫っていることを語る。田村は都で大嶽退治の勸賞を受け、急ぎ鈴鹿山へ向かうが、鈴鹿の臨終には間に合わず、田村はその側で思い死にする<sup>29</sup>。しかし田村は冥途で閻魔を脅迫し、鈴鹿と共に蘇生することを許され、幸せに暮らしたという。これに対して東急本では、立山の鬼神（大嶽に相当）を退治すると鈴鹿は次のように言う。

「みらいやう／＼にいたるまで、あくまのいつる事  
あらし。御身はみやこにのほり給ひ、君をしゆこし  
給ふへし。みつからはすゝかにかへりて、まつへき  
なり。うれしきかなや、御身は九十七の秋のころ、  
みやこをさつて、すゝか山に來り給ふへし。さあら  
は、みつからかすみかへむかへ奉り、むりやうこ  
うのそのあひた、契りたかへす、すむへきなり。いと  
ま申」とて、たちわかれ給ひけり。

その後、俊宗は都で大いに榮え、「くにもゆたかに、  
たみもさかへ、きしんのいつる事もなく、めてたかりし  
御代」となる。そして清水山に堂を建てて立山鬼神退治  
の際の駿馬を祀り（田村堂、九十七歳の秋には鈴鹿山に  
隱居し、不老不死の薬により「御とし十七のすかたとな  
り給ひ、むりやうここのたのしみをうけ、天下をまもり  
給ふ」という。鬼退治の高揚が主人公らの死によつて萎  
むことなく、物語は結末に向かうのである。さらに、  
「としむねのいくはんのまき物にも、たい／＼天下のし  
やうくんは、かならず、わかさいたんなり」とあると記  
し、末尾を「目出度御代とそ成にける」として結ぶのは、  
単に物語が大団円を迎えたというのではなく、徳川將軍  
による太平の世を言祝ぐものと考えられよう。このよう

に主人公の敗北や非業の死を避け、祝言性を強調するこ  
とも東急本の特徴である。

さらにこれらに加えて、奇瑞や怪異のあり方が弱めら  
れていることも指摘しておかねばならない。その例とし  
て、悪路王退治の際の開門描写<sup>⑨</sup>が挙げられる。他本に  
おいては、盤石のごとき城門を開きかねた俊仁が鞍馬の  
多聞天に祈ると、扉が直ちに開く。これに対して東急本  
では、俊仁自身が門をねじ切つて扉を開く。つまり、他  
本においては奇瑞が記されていた箇所が、主人公の怪力  
を示す描写に変わっているのである。奇瑞や怪異など超  
自然的現象の描写を弱めることは、近世的な合理主義の  
現れと見てよいであらう。

右のごとき、社会秩序の反映や祝言性の強調、合理化  
は、いずれも時代思潮を反映するものとして把握できる  
であらう。

#### (五) 構成の緊密化

別稿で述べてきたように、『鈴鹿の物語』は数多くの  
説話を継ぎ合わせ、組み替えて成っている。そのような  
成り立ちゆえに、古本系においては特に、その素材の継  
ぎ目が見え隠れする。加えて、物語の展開が直線的であ

り、構成に緊密さを欠く。このことは予言と怪物退治が何度も繰り返されるという点において特に目立つ。無論、このような構成が稚拙ゆえのものではなく、物語成立時点において何らかの意味を担っていた可能性はある。たとえば、宗教儀礼と関わるなどの可能性である。しかしながら純粋に文芸作品として本作を見た場合、出来事と出来事の繋がりに関係が薄く、物語の展開において無意味とも思える描写が度々挟まっていることは、やはり欠陥と言い得よう。

これに関して、東急本は多くの点で改善を試みている。典型例はみなれ川大蛇退治<sup>⑤</sup>から俊仁流罪<sup>⑥</sup>に至るくだりである。

他本において、みなれ川の大蛇は二頭であり、名は「くらみつ・くらのすけ」である。<sup>(20)</sup>この大蛇は次のように語る。

淵の底より、なかさ三百尋計なる大蛇出て申けるは、「汝か為にはおぢ也。近江の湖に住大蛇は、我か為には姉成。又、汝か母の増田の池の大蛇は、我ためには妹なり。既に三界に年を経て十千歳成、此川に住みても三千五百歳、汝は僅に十三歳、我に敵対してなにすへきそや」とて、口より炎をいたす。

大蛇は日りう（俊仁）にとって伯父であった。しかし日りうはその事実全く反応せず、伯父にあたるはずの大蛇を直ちに射殺し、肝を取って帰洛する。その後、俊仁は照日と恋仲になるが帝の嫉妬により無実の罪で流刑にされる。その際、勢多の橋で「ひと、せ、みなれかはにての、くらみつ、くらのすけかたましる、このかにはそあるらん。みやこへのほりて、あくしをせよ」<sup>(21)</sup>と命じると、「壺入たる油より、尾頭出来て、八の大蛇と成て、都のうちにて人をはみ喰」という事態に至る。

右の展開においては、大蛇が二頭であることも、大蛇が名づけられていることも、俊仁の伯父にあたることも、作中においては特段の意味を持たない。それどころか、討ち取られた大蛇がなぜ俊仁のために暴れるのか、当初の編者にとっては自明であったのかも知れないが、後の読者にとってはあまりにも唐突である。これに対して、東急本はこのような散漫さを一掃するべく改めている。大蛇は一頭であり、名前は記されない。そして何より、退治すべき大蛇が伯父にあたることを知った俊仁は次のように言う。

さては御身は、わかは、のけんそくなるかや。そのはうおんに、たすけ侍らんとおもへとも、われ天下

のしやうくんとして、くに／＼のしゆこなれば、たすけをくへきにあらす。われにいのちをあたへよ。

しからは、神といはふへし。

大蛇はこの言葉に感激してみずから首を延べて討たれ、俊仁は勢多の橋の下に島を築き龍王権現として大蛇を祀る。かかる事情ゆえに、俊仁流罪の際、俊仁への援助として大蛇は大雨を降らし、都をおびやかすのである。

このように東急本においては、大蛇が俊仁の縁者であること、俊仁が大蛇を祀ること、大蛇が俊仁を援助することの三要素が強く関連づけられており、物語としての緊密性が増している。

同様のことは、立山の鬼神（他本では大嶽）退治<sup>27</sup>の際にも窺える。古本系諸本において、鈴鹿の手引きで鬼の城内に潜入した田村（俊宗）は、鈴鹿と三年ぶりの対面を果たし、会話に続いて管絃の遊びをする。そこに外出中の大嶽が帰還し、田村の侵入に怒り、戦いが始まる。これに対して東急本では、俊宗は鈴鹿の母（立山鬼神の妻）にもてなされ、酒宴が行われる。その後、事情を知った鈴鹿の母は夫を討つことに同意し、「そのときにおよふならば、天上にかへるへし。なこりおしくさふらへは、こよひは、よもすからくはんけんして、かな

しきおもひをはらすへし」と管絃を始める。そこへ鬼神が帰り、楽の音を聞き「あらおもしろのしらへかな」、「せひなくいらんも、さしきのけうさまさんとして、しやくとりなをし、ひやうしにかゝつてまひ入」ったところ、俊宗・鈴鹿の待ち伏せをうけて首を討たれる。ここでは管絃を始める理由と鬼神退治が関連づけられており、先ほどの大蛇退治の際と同様、これも緊密化のための改変であると言つてよからう。

#### （六） 固有名詞の変更

東急本における様々な改変の中で不可解なのは、固有名詞の変更が見られることである。たとえば、他本において俊仁の父は「俊祐（としゆう）」であり、「俊重（とししげ）」は俊仁の祖父であつて系譜上の存在に過ぎず、物語中には登場しない。ところが、東急本において俊仁の父はその「俊重」である。他に人物名が変更されているものとしては、他本においては「かすみの源太」と呼ばれる田村の郎等が東急本では「たはらの源五かねまさ」、他本の「かなつぶて」が東急本では「かな丸のにうたう」となっていることが挙げられる。

また、他本においては名を記されている人物が、東急

本においては固有の名を失っているものもある。みなれ川の大蛇（くらみつ・くらのすけ）、俊仁の妻（照旦）、鈴鹿の娘（しやうりん）、悪事の高丸、高丸の娘（きはた）、大嶽がそれである。これらの変更・削除の意図は不明であると言わざるを得ない。物語上に名前が不必要であるとか、人名らしからぬと判断されたのであろうか。

高丸・大嶽にあたる鬼神の居所も変更されている。他本において高丸は近江国蒲生原に、大嶽は陸奥国霧山嶽に現れるが、東急本においてはそれぞれ信濃国戸隠山・越中国立山である。戸隠山については謡曲『紅葉狩』によつて平維茂による鬼退治譚が知られ、立山については同地が地獄に通ずる場所であるとする説話が古くから知られていたから、鬼退治の舞台としてよりふさわしい場所と考へて変更したのであろう。特に立山については、物語前半での悪路王退治が陸奥国を舞台としていたから、二度も陸奥を舞台にするのは避けたいという意識が働いたことによるものかも知れない。

### まとめ

東急本の特徴を分類すれば概ね以上のごとくにならう。付表に記した通り、右に取り上げた以外にも改変は数多

い。しかしその改変・再編集のあり方をこのように整理すると、東急本は大規模な改作を経ていながら、決して『鈴鹿の物語』の枠を越えるものではないことが分かる。つまり、登場人物名や鬼の居所が変わつていようと、描かれている内容そのものは古本系諸本とほとんど変わらないのである。変化しているのはそれぞれの怪物退治譚の趣向や、出来事間の関係性に過ぎず、その変化も先述の通り、時代思潮の反映や構成の緊密化などの方針によるものとして説明しうるものである。

東急本はその点において、物語の枠組みそのものに手を加えた流布本とは性質が異なる。先に述べた通り、流布本は物語後半において重大な変更を加えるものであった。最大の変化は、謡曲『田村』を文飾のみならず枠組みにおいても取り込んだことである。それによつて鈴鹿御前は当初から田村の助力者として登場することとなり、彼女との戦いは描かれず、その一方で大嶽との戦いは二箇所に分裂した。これは鈴鹿御前に重点を置く古本系とは大きく異なるものであり、田村を英雄として活躍させる「田村もの」古浄瑠璃と通ずるものと言い得る。

もちろん、東急本にも流布本と共通する傾向は見られる。神通の鐙矢について「一度はなち給へは千のやさき



となり」と説明するのは謡曲『田村』の「大悲の弓には、知恵の矢はめて、一度放せば千の矢先、雨霰と降りかかつて」によるものであろうし、田村（俊宗）の強さが際立つのも流布本と同様である。しかしながら、東急本の編者は話の流れそのものにはほとんど手を加えなかった。次々と生起する出来事同士を関連づけ、軍記風の文飾を加え、心情描写を増やすことによって物語としての膨らみが存分に付け足された『鈴鹿の物語』、それが東急本であると言つてよい。

では、東急本は『鈴鹿の物語』の完成形であろうか。物語の品質という面で言えば、確かにそのように評価することもできる。矛盾を減らし、緊密性と具体性を加える時には登場人物の心の動きにも筆を費やす東急本は、文芸作品という意味では古本系を大いに進歩させた姿であろう。しかしその一方で——筆者の主観に過ぎないのであるが——この平板さはどうしたことか、とも思うのである。鬼退治に際して、人間に對してするような作戦の描写が果たして必要であろうか。俊仁と不動明王が直接戦うという独創的な描写を、元寇ないしは『百合若大臣』を思わせる船戦に変えることで、面白さが増したであろうか。それらは古本系の荒唐無稽な愉快さを殺す、

余計な作為ではなかったか。

詰まるところ、『鈴鹿の物語』は増補と合理化に向かない作品であつた。そもそも室町物語としては長編であり、内容も多い作品である。そこに説話や辻褃合わせ、心情描写を加えてしまえば、元々あつた冗長さが一層強まってしまうのは当然であろう。そのような増補を行うのであれば、作品を再構成したり、何段かに分割して区切りを付けたりする他あるまい。そしてそれはまさに、浄瑠璃の手法であつた。古浄瑠璃作者達は、『鈴鹿の物語』から場面を抜き出し、組み替え、大胆な脚色を加えて新たな作品群を生み出した。一方で奥浄瑠璃の語り手達は、『鈴鹿の物語』の姿をかなり留めながらも各所に独自要素を継ぎ足し、あるいは場面を差し替えて、物語を再生産していった。<sup>(25)</sup>『鈴鹿の物語』を生まれ変わらせ、生き延びさせていくには、このような語り物化、演芸化こそが妥当な方法であつたであろう。物語草子としての『鈴鹿の物語』にとって、東急本は、いわば改作の袋小路に咲いた花であつた。

#### 註

(1) 書写時期については、所蔵機関の蔵書目録や、翻刻・

影印を収めた書籍・論文の解題によった。また、横山重氏・松本隆信氏編『室町時代物語大成』（角川書店）は『大成』と略した。

- (2) 横山重氏編、古典文庫、一九六一年。引用に際しては一九七五年の再刊本を使用した。

- (3) 『國學院大學校史・學術資産研究』四号、二〇一二年三月

- (4) 同じく天理図書館蔵の古活字版と区別するため「天理写本」と呼ぶこととする。

- (5) 汲古書院、二〇〇四年

- (6) 諸本の整理については拙稿『鈴鹿の物語』の諸本——本文系統の整理をめざして——（『国語国文』八〇巻五号、二〇一一年五月）に詳しく述べ、また、その後に紹介された國學院本を含めた考察は『鈴鹿の物語』の編集と変容」（博士論文、大谷大学、二〇一三年）第二章にまとめた。

- (7) 新日本古典文学大系『謡曲百番』岩波書店、一九九八年

- (8) 流布本の成立と性質については、拙稿『鈴鹿の物語』から『田村の草子』へ——写本から流布本への変容——（『文藝論叢』八一号、二〇一三年一〇月）で論じた。

なお、寛永一七年『華足寺縁起』にも、「大たけと云鬼神出来して伊勢の国鈴鹿山までせめ上る」とあり、田村丸が鈴鹿御前の援助を受けてこれと戦い、奥州で討つたとある（大橋和華氏「三ノハザマの新長谷寺」に関する口承資料の紹介——『竹峰山華足寺縁起』を中心に——

『藝文東海』一四号、一九八九年二月）。この縁起は、武蔵国中野宝仙寺の住職が慶長一七年に陸奥国華足寺に住居した際、土地の古老から聞いたとするものである。流布本はこのような伝承を取り込んだ上で謡曲『田村』の詞章を利用したとも考えうる。しかし『華足寺縁起』の語を執筆経緯をそのまま信ずることは難しく、同縁起自体が流布本『田村の草子』の影響を受けたものと考えられることもできるように思われる。

- (9) みなれ川は、武蔵国児玉郡を流れる身馴川（現在の小山川）であろう。身馴川付近の寺社縁起や地名由来譚には坂上田村麻呂による大蛇退治が伝承されている。身馴川大蛇退治の伝承は次の諸書に見える。木暮秀夫編『武蔵国児玉郡誌』（名著出版、一九七三年）東児玉村北向神社・金讃神社、柴田常恵・稲村坦元編『埼玉叢書・三』（国書刊行会、一九七〇年）所収「武蔵国那珂郡古郡村日光山安光寺記」、柳進氏『県北の伝承と民俗』（私家版、一九七六年）「大蛇と高柳」「骨波田」「風洞の字名」。

- (10) 東急本の引用は『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世篇 物語草子Ⅰ』の影印によった。

- (11) 諸本により揺れはあるが、俊仁の母は「ますだが池」の大蛇であり、みなれ川の大蛇の姉（または妹）でもある。

- (12) なお、俊仁が訪ねる木について、高野本・天理写本は「くちき（朽木）」、Ⅱ類本は「ふしき（伏木）」とする。この点についても東急本はⅡ類と同じである。

(13)

(14)

古本系の引用は、特に断らない限り万治本に基づいた。俊重は妻の懐妊期間が三年三月に及ぶことを知り、「むかしをつたへてきく、ふつきしんわうは、は、のたいないに八十年やとり、しらかをいた、きむまれいてくすりのしとなり給ふ。はんさうといひしつはものは、三ねん三月にてたんしやうし、ゆみやをとつてのめいしやうなり」と故事を引くが、典拠未詳。

(15)

後の再会を約すことは古本系Ⅱ類と東急本に見られるが、Ⅰ類にはない。先述のごとく東急本はⅡ類本との共通点が見受けられるが、これもその一つと見てよい。

(16)

この箇所は流布本も大幅に増補しているが、その内容は東急本とは全く異なる。

(17)

本来「慳貪剣」とあったものか。拙稿『鈴鹿の物語』の悪路王退治譚―その素材と構成方法―(『国語国文』八七卷一―号、二〇一八年一―月) 参照。

(18)

前注(17)

(19)

『壬生家文書・二』(図書寮叢刊、明治書院) 所収。

(20)

大蛇の名は諸本により揺れがあり、高野本「みつくしのたけ」、万治本「海満・海月」、吉田本・國學院本「くらみつ・くらのすけ」、流布本「くらみつ・くらのすけ」、天理写本は記述なし。「くらみつ・くらのすけ」が本来の形で、他は誤字や誤解に基づくものであろう。この大蛇の名について、平出鏗二郎は『鞍馬蓋寺縁起』に

おいて藤原利仁が討つたとされる盗賊「蔵宗・蔵安」がその名の原拠ではないかと示唆しており(『室町時代小説集』精華書院、一九〇八年)、野村八郎もそれを追認している(『室町時代小説論』第二章、巖松堂書店、一九三八年)。

(21)

この箇所のみ、引用は國學院本に拠った。

(22)

他本におけるかすみの源太は、大嶽退治の際にしか登場しない。一方、東急本の田原源五かねまさは、匈奴迎撃や立烏帽子搜索の際にも登場する。なお、田村将軍を主人公とする古浄瑠璃においても、一致する郎等の名は見られない。

(23)

『法華験記』下・八九話、同一二四話、『今昔物語集』一四・七話など。

(24)

この詞章の利用は近世の田村もの文芸に付きものである。拙稿(前注(8)) 参照。

(25)

福田見氏は「馬の家」物語の系譜(上)―「田村語り」をめぐる―(『立命館文学』四八五・四八六号、一九八五年) において、奥浄瑠璃『田村三代記』は「田村の草子」に拠って、それなりの独自の叙述を見せたもの」とされている。

(26)

福田見氏は「馬の家」物語の系譜(上)―「田村語り」をめぐる―(『立命館文学』四八五・四八六号、一九八五年) において、奥浄瑠璃『田村三代記』は「田村の草子」に拠って、それなりの独自の叙述を見せたもの」とされている。

(27)

福田見氏は「馬の家」物語の系譜(上)―「田村語り」をめぐる―(『立命館文学』四八五・四八六号、一九八五年) において、奥浄瑠璃『田村三代記』は「田村の草子」に拠って、それなりの独自の叙述を見せたもの」とされている。

(28)

福田見氏は「馬の家」物語の系譜(上)―「田村語り」をめぐる―(『立命館文学』四八五・四八六号、一九八五年) において、奥浄瑠璃『田村三代記』は「田村の草子」に拠って、それなりの独自の叙述を見せたもの」とされている。

(29)

福田見氏は「馬の家」物語の系譜(上)―「田村語り」をめぐる―(『立命館文学』四八五・四八六号、一九八五年) において、奥浄瑠璃『田村三代記』は「田村の草子」に拠って、それなりの独自の叙述を見せたもの」とされている。

(30)

福田見氏は「馬の家」物語の系譜(上)―「田村語り」をめぐる―(『立命館文学』四八五・四八六号、一九八五年) において、奥浄瑠璃『田村三代記』は「田村の草子」に拠って、それなりの独自の叙述を見せたもの」とされている。

(31)

福田見氏は「馬の家」物語の系譜(上)―「田村語り」をめぐる―(『立命館文学』四八五・四八六号、一九八五年) において、奥浄瑠璃『田村三代記』は「田村の草子」に拠って、それなりの独自の叙述を見せたもの」とされている。

(32)

福田見氏は「馬の家」物語の系譜(上)―「田村語り」をめぐる―(『立命館文学』四八五・四八六号、一九八五年) において、奥浄瑠璃『田村三代記』は「田村の草子」に拠って、それなりの独自の叙述を見せたもの」とされている。

(33)

福田見氏は「馬の家」物語の系譜(上)―「田村語り」をめぐる―(『立命館文学』四八五・四八六号、一九八五年) において、奥浄瑠璃『田村三代記』は「田村の草子」に拠って、それなりの独自の叙述を見せたもの」とされている。

(34)

(35)

福田見氏は「馬の家」物語の系譜(上)―「田村語り」をめぐる―(『立命館文学』四八五・四八六号、一九八五年) において、奥浄瑠璃『田村三代記』は「田村の草子」に拠って、それなりの独自の叙述を見せたもの」とされている。

(本学非常勤講師)

【付表】 古本系と東急本の粗筋対照表

<p>《古本系の粗筋》（傍線部は東急本との相違箇所）</p>	<p>《東急本の相違点》</p>
<p>① 俊重將軍の子、俊祐將軍は結婚と離婚を際限なく繰り返していたが、五十一歳になっても満足できる妻が見つからず、子もなかった。俊祐は理想の妻を得るため上洛する。</p>	<p>俊祐の名はなく、他本における俊祐は全て俊重に置き換わっている。俊重の年齢は四十一歳で、上洛は一番役のため。</p>
<p>② 九月、俊祐は嵯峨野へ遊覧に出かけ、そこで歌を詠む女を見つけた。俊祐は女と契り、越前に戻る。</p>	<p>嵯峨野遊覧に際して僧正遍昭「名に愛でて」の歌を引く。俊重は出会いに際し、『伊勢物語』第六段・第一四段を想起する。</p>
<p>③ 俊祐の北の方は懐妊するが、出産は三年後といい、また、高い壇を築き、そこに産所を建てるよう求める。出産に際しては、七日間は見てはならないと言う。しかし俊祐は我慢できず、六日目のにぞき見する。すると産所にいたのは大蛇であった。八日目、北の方は自分がますが池の大蛇であることを明かし、子は天下の將軍となるべきことを語り、子に日りうと名づける。さらに、日りう三歳にして俊祐が死ぬこと、七歳にして宣旨を蒙ることを予言し、姿を消す。</p>	<p>北の方は『法華経』提婆達多品の龍女同様、成仏すべき身であること語る。</p> <p>宣旨についての予言なし。</p>
<p>④ 北の方の予言通り、日りう三歳の時に俊祐は死去する。七歳の時、みなれ川の大蛇を退治せよとの宣旨を蒙る。戸惑う日りうに對し、めのは俊祐五歳の時の大蛇退治を語り、重代の宝である角の槻弓・神通の鎧矢を渡す。</p> <p>（※みなれ川の所在地は、高野本・天理写本では武蔵国。その他の諸本では近江国）</p>	<p>大蛇退治について公卿僉議があり、かつては伝教大師の力により魔物は出現しなかったと語られる。</p> <p>父の大蛇退治は十歳。</p> <p>角の槻弓ではなく鉄の弓。神通の鎧矢は、放つと「千の矢先」になる上、腋に戻るといふ。</p>
<p>⑤ 日りうは軍勢を率いて身馴川に至るが、大蛇の起こした川波によって軍勢は壊滅する。一人残った日りうが山神に祈ると川が干上がり、二匹の大蛇が現れる。大蛇は自分が日りうのおじに当たることを言う</p>	<p>日りうは將軍の綸旨を賜り、俊仁と名乗る。俊仁は軍勢を隠し、水底に潜む大蛇を鎧矢によって出現させる（軍勢壊滅の件なし）。大蛇がおじであることを知った俊仁が、大蛇に「我に命を与へよ、しからば</p>

<p>が、日りうは神通の鎧矢にて大蛇をたやすく討ち取り、肝から油を取って凱旋する。</p>	<p>神と祝ふべし」と語ると、大蛇はみずから首を延べて俊仁に討たれる。俊仁は大蛇を龍王権現として勢多橋の島に祀る。</p>
<p>⑥ 日りうは俊仁將軍となる。俊仁は照日という姫と恋仲になるが、照日は入内する。しかし照日の心は俊仁に向いており、怒った帝は俊仁を伊豆へ流す。配流の道中、俊仁は勢多の橋にて、身馴川の大蛇の魂に、都で悪事をなすようけしかける。すると都では大蛇が暴れ、大騒動になる。博士の占いにより、事態が俊仁ゆえであると判明したため、俊仁は赦免されて帰京し、大蛇の害も収まる。</p>	<p>照日の名はない。 入内する途中で俊仁が姫を強奪したことで流罪になる。 大蛇の害は大雨・洪水であり、大蛇自身が暴れるわけではない。</p>
<p>⑦ 俊仁と照日は結ばれ、二人の姫が生まれる。ある時、俊仁の留守中に庭を眺めていた照日が、魔物に攫われ行方不明となる。照日を捜しあぐねて途方に暮れた俊仁は夕占を問う。それにより老夫婦の会話を聞き、次いで三人の童の会話を聞くことで、俊仁は天狗の教光坊・三郎坊、鬼の大嶽・高丸・悪路王の存在を知る。</p>	<p>童の会話では、教光坊に話を聞くべきことが直接的に示される。三郎坊・大嶽・高丸・悪路王の名は語られない。</p>
<p>⑧ 俊仁は愛宕山の教光坊に妻の行方を尋ねる。教光坊は鬼の仕業であると教え、帰り道の伏木に子細を聞けと教える。伏木を訪ねると、伏木は大蛇の姿を現し、みずからは俊仁のおばであると語る。大蛇は、照日を攫ったのは陸奥の悪路王であると告げ、鞍馬の多聞天を頼るべきことを教え、姿を消す。俊仁は鞍馬に参籠、剣を賜り、鬼に妻子を取られた美濃前司らを誘って陸奥へ下る。 (※高野本・天理写本では、教光坊に次いで東山の三郎坊を尋ね、助言を受ける。また、大蛇の正体は俊仁の母。)</p>	<p>伏木の中から蛇が現れ、俊仁に助言する。この蛇は俊仁の母の神魂であり、魂魄は冥途で無量の楽しみを受けていると語る。 悪路王退治には、主要な人々の他に、五百余騎の軍勢を伴う。</p>
<p>⑨ 俊仁は陸奥国田村郷にて賤女と契り、形見の品として上差しの鎧矢を与える。悪路王の城に着くと、門前で女と会う。この女は同行者の一人である美濃前司の娘で、鬼に攫われて以来、使役されているのであった。俊仁は女から悪路王が留守であることを聞き、門前の龍馬</p>	<p>美濃前司の娘から妻存命の由を聞く。一行は女の案内で城に入る(龍</p>

<p>によつて城内に飛び入り、多聞天の力によつて開門し、同行者らを城内に導く。</p>	<p>馬の件なし。多聞天による開門なし。扉は多聞天の力によつて開くのではなく、俊仁が門をねじ切る。</p>
<p>⑩ 俊仁らは城内を搜索し、多くの女を救出する。しかし、ある同行者の妻は遺体で発見され、夫は悲嘆に暮れる。俊仁も照日と再会する。照日は、悪路王らは明日の午の刻に帰ると教える。俊仁らは城内で鬼を待つ。</p>	<p>遺体で発見される女の件なし。</p> <p>俊仁らは軍議を行い、一旦城を空にして山に隠れ、鬼の帰還したところへ攻めかかることを決める。</p>
<p>⑪ 悪路王らが帰還し、俊仁らと対峙。悪路王らが無数の目で俊仁らを睨むと、その眼光の恐ろしさに一行のほとんどは気絶、俊仁と美濃前司のみが残る。俊仁が多聞天に祈ると月日が俊仁の両目に宿り、その光により鬼の目が落ち、血の涙を流す。俊仁が剣を投げ、悪路王らの首を討つ。一行は鬼の死骸を焼き、女を解放して凱旋する。</p>	<p>帰還した悪路王らは城内が空になっていることに気づいて怒り、氣勢を上げ、酒宴を始める。そこに俊仁らの軍勢が攻めかかり、戦いとなるが、俊仁らは苦戦する。俊仁は「霧の印」で姿を隠し、さらに多聞天の助力を得て、剣を投げ、悪路王の首を討つ。残る鬼も討ち取ったところに近国からも武士が攻め寄せ、鬼ヶ城を焼き払う。</p>
<p>⑫ 俊仁は後継者としての男児がないことを嘆く。一方その頃、田村郷賤女は男児を産み、ふせり殿と名づけて養育していた。ふせりは七歳の時、父がいらないことについて母に尋ねる。母ははぐらかすが問い詰められ、山の土中に隠した形見の品について言う。ふせりがそれを見つけると、母は、父は俊仁將軍であることを明かす。ふせりは一人都へ向かい、十三日の道を三日で行く。</p>	<p>母は父のことを尋ねられるとすぐに事実を明かし、次いで形見の鎧矢を取りに行かせる。母子の別れの悲しみを強調する。</p> <p>都へは十三日かかって到着。</p>
<p>⑬ ふせりは俊仁邸の門外に佇み、対面の機会を待つ。折節、俊仁らが庭で蹴鞠を行い、飛び出た鞠をふせりが蹴返すことをきっかけに父子の対面を果たす。ふせりは形見の鎧矢を示し、俊仁は親子であることを認め、迎え入れる。</p>	<p>鞠を蹴返すのではなく、鞠を取りに出た者に話しかけることで対面に至る。</p>
<p>⑭ ふせりは毎夜桂川を軽々と飛び越えるという超人的能力を示す。九歳で朝日と改名する。俊仁は朝日の器量をはかるため、食事中に矢で射るが、朝日は矢を箸で受け止める。十一歳で日りうと改名する。</p>	<p>川を飛び越える件なし。</p> <p>俊仁の試練は、剣で斬りかかる、矢で射るという内容が連続的に描写され、帝釈・修羅の戦いに譬えられる。日りうへの改名なし。</p>

俊仁はさらに器量を試すため、就寝中に剣を投げかけるが、剣は袂に留まる。日りうは十三歳で元服し、稲瀬五郎俊宗と名乗る。

⑮ 老いを感じた俊仁は、末代の伝えにと唐土攻めを帝に進言し、大船団を率いて唐土に向かう。俊仁の投げた火界の印により唐土では火の雨が降る。俊仁の軍勢が迫っていることを知った唐土が惠果和尚による不動明王法を修すと、不動らの大軍が海上に出現、俊仁軍と戦闘になる。劣勢になった不動は鞍馬の多聞天と談判し、俊宗に代わって不動が日本を守護することを条件に、俊仁への助力をやめさせる。多聞天から賜った剣も飛び去り、加護を失った俊仁は討ち死にする。遺体は博多に漂着する。

⑯ 大和国奈良坂山に金飛礫という化物が現れ、往来を妨げているので退治せよとの宣旨が俊宗に下る。囃の荷物におびき出された金飛礫は、三郎飛礫・次郎飛礫・太郎飛礫を順に投げるが、いずれも俊宗にたやすく打ち落とされる。俊宗は神通の鎗矢の音で金飛礫を苛み、降参させて捕縛し、栗田口で処刑する。この功により、俊宗は出生地である田村郷を賜り、「田村の將軍」の称を得る。

⑰ 伊勢国鈴鹿山に立烏帽子という女が現れ、往来を妨げているので退治せよとの宣旨が下る。田村は軍勢を率いて搜索するが立烏帽子は見つからない。田村は自分一人が留まって立烏帽子を搜索すると主張し、軍勢を都へ帰す。ある時、神仏に祈ると、今まで見つからなかった小笹原が現れ、その奥の壮麗な屋敷に至る。

⑱ 田村は壮麗な屋敷の奥へ進み、立烏帽子（鈴鹿御前）を見つける。その美貌に田村は心引かれつつも戦いを挑む。剣同士が鷹や猫に変わって戦うが、鈴鹿の圧勝に終わり、田村は鈴鹿の提案で彼女と結婚する。

十三歳にて宣旨があり、朝日の將軍田村の俊宗と名乗る。

俊仁は隠居し、百二十歳で往生する。手柄もなく將軍になった俊宗が衆人から疑問視されているのに乗じ、匈奴の大軍が日本に攻め寄せ、博多の沖に迫る。俊宗は將軍として出陣する。郎等の田原源五かねまさは龍城戦を主張するが、俊仁は攻撃を指示し、船戦となる。匈奴は不動明王を本尊に修法を行い（惠果の名なし）、俊宗は毘沙門天を本尊に修法を行ったところ、匈奴軍の不動像が突風に吹き上げられ、匈奴は壊滅する。不動像は鞍馬寺に納められ、不動坂の語源となった。俊仁が毘沙門天から賜った剣は俊宗に相続される。

化物の名は「金丸の入道」であり、金飛礫という名は記されない。退治は宣旨ではなく自発的なもの。飛礫を投げることや鎗矢の音で苛む描写はない。  
鎗矢の毒で弱らせて討ち、首を六条河原に晒す。退治後、俊宗は大軍を率いて田村郷へ所知入りし、母と再会し、館を建てて三年過ごす。

立烏帽子の出現は、俊宗が奥州に下り、都周辺の守りが手薄になったことによる。

軍勢を都へ帰す際には、田原源五かねまさとの会話がある。俊宗は一人で搜索を続けて洞窟を発見し、その奥の異境に至る。「田村」という呼称は用いられない。

立烏帽子邸の様子を見た俊宗は都に援軍を求め、軍勢が駆けつける。攻め方を僉議しているところに立烏帽子（鈴鹿）が現れ、俊宗との戦いになる（剣の変化は描かれない）。戦いつつ、俊宗・鈴鹿は互いに



<p>ことになる。管絃の宴が行われる。        (二人の出会い以後、「立烏帽子」という呼称は用いられない)</p>	<p>惹かれる。俊宗は軍勢を都へ帰し、鈴鹿に思いを告げる。鈴鹿は悪事をやめることを誓い、二人は結ばれる。(以後、「立烏帽子」・「鈴鹿」の呼称が混在する)</p>
<p>㉑ 鈴鹿は女兒を産み、しやうりんと名づけられる。三年後、望郷の念を募らせた田村は、鈴鹿を騙して都へ連れて行く由の文をしたため、雁に託す。文は内裏に届けられ、軍勢が田村・鈴鹿の参内を待ち構える。しかしこの計略は鈴鹿に知られており、鈴鹿は田村の心変わりを見難するも、神通の車に乗って共に内裏に向かう。</p>	<p>鈴鹿は一男一女を儲ける(名の記載なし)。三年後、都では俊宗の消息不明のまま、信濃国戸隠山に鬼神が出現した由が朝廷に伝えられる。閑白はまず鈴鹿山を搜索して俊宗の安否を確認し、その後に田原源五かねまさ(に)十万余騎を与えて戸隠の鬼神を討つべしと言う。この評定を知った鈴鹿は、屋敷を荒らされるよりはみずから出向こうと、俊宗と共に雲を駆ける車に乗り、内裏に向かう。</p>
<p>㉒ 神通の車は軍兵に妨げられることなく内裏に降り立ち、鈴鹿は帝と対面する。鈴鹿はみずからは天女であり、討伐される言わけではないことを主張する。そして田村に別れを告げ、二十一日後、近江国蒲生の鬼神悪事の高丸を退治せよとの宣旨が下る旨を予言し、一人鈴鹿山へ帰る。</p>	<p>鈴鹿山へ発向せんとする軍勢がひしめく内裏に雲を駆ける車が降り立つと、軍勢は恐慌状態に陥る。帝が俊宗に国家の守りたるべきことを命じると、俊宗は鈴鹿に別れを告げる。鈴鹿は俊宗を守護することを誓い、虚空へ去る。(既に鬼神が出現しているため、鈴鹿による予言なし)</p>
<p>㉓ 鈴鹿の予言通り、近江国蒲生に悪事の高丸が出現、これを退治せよとの宣旨が下る。田村が軍勢を率いて蒲生を攻めると高丸親子は各地を転々と逃げ、外が浜の沖の海上にある岩屋に立て籠もる。攻めあぐねた田村は一旦退却する。</p>	<p>俊宗は軍勢を率いて戸隠山に向かう。その威勢を恐れた鬼神は妻子と共に姿をくらます。俊宗は鬼神の所在をつかめないまま途方に暮れていると、夢に鈴鹿が現れ、鬼神は千賀の塩竈の沖にある旨を告げる。俊宗は千賀の塩竈に向かう。退却の件なし。</p>
<p>㉔ 都への帰路、鈎の宿にて、鈴鹿が現れ助勢を申し出る。鈴鹿は軍勢を帰らせ、田村と二人で神通の車に乗り、再び外が浜に向かう。籠城する高丸らを油断させるため、鈴鹿は星を招いて舞を舞わせる。その舞楽に誘われ、高丸の娘が岩戸を開けるよう父に求める。高丸は娘にほだされて岩戸を開ける。その隙に鈴鹿が高丸の左目を射貫き、次いで剣で首を討つ。</p>	<p>浜辺で攻めあぐねる俊宗のもとに鈴鹿が現れ、天女に舞を舞わせる。鬼神が娘にほだされる件なし。        俊宗の矢は胸・首に立つ。鬼神を討ち取ると、干珠の玉を投げて海を干上がらせ、軍勢が鬼ヶ城を攻め落とす。鬼神の二人の娘を生け捕りにする。</p>

<p>㉓ 高丸退治後、田村は鈴鹿との復縁を望むが、鈴鹿は拒む。それは、鈴鹿は大嶽という鬼に言い寄られており、まもなくその大嶽が彼女を捕らえに来るからであった。鈴鹿は大嶽退治の宣旨が田村に下ることを予言し、それに先立って大嶽の魂を抜き、田村にたやすく大嶽を討ち取らせるつもりであることを語る。田村は抵抗するが説得され、また名馬を求めるべきことを教えられ、高丸らの首を伴って凱旋し、褒美に預かる。</p>	<p>鈴鹿は、来春に越中立山に鬼神が出現することを予言し警戒を促し、また来春の再会を約して去る。田村が復縁を求める件や鈴鹿がわざと取られる件、馬を求めるべき助言、いずれもなし。</p>
<p>㉔ 鈴鹿の助言に従って馬を探していた田村は、今にも倒れそうな痩せ馬を売る翁を見つける。田村は高値で馬を買取り、さらに多くの引き出物を翁に与えた。翁は都で一番の貧者から、一番の金持ちとなった。田村は痩せ馬を空駆ける龍馬に育て上げる。</p>	<p>突如、宮中に駿馬が現れる。公卿僉議があり、中国の故事などが言及されるが、最終的に俊宗に与えられる。俊宗は馬を乗りこなし、曲乗りを披露する。</p>
<p>㉕ 鈴鹿の予言通り、陸奥国霧山嶽に大嶽が出現し、その退治の宣旨が田村に下る。田村は郎等の霞の源太一人を伴い、件の龍馬で陸奥に下る。霧山嶽に着くと鈴鹿の手引きによって城内に導かれる。</p>	<p>鈴鹿の予言通り、越中立山に鬼神が出現する。退治の宣旨なし。俊宗は鈴鹿の助力を得ようとするが、鈴鹿の居所がわからないため、途方に暮れて馬に鈴鹿の在処へ連れて行くよう命じると、馬は越中立山の「鬼が岩屋」に至る（従者は田原源五かねまさ一人）。俊宗はいぶかるが、岩屋に乗り込むと中から鈴鹿が走り出で、中へ招き入れる。</p>
<p>㉖ 田村は城内で鈴鹿と再会し、大嶽の魂は鈴鹿によって奪われていること、大嶽は主の八大王に挨拶するため外出していることを聞き、管絃の遊びを行う。 (※大嶽の外出理由は、高野本・小野本では異国の姫を取りに行くため)</p>	<p>俊宗は鈴鹿が立山にいる理由を尋ねると、鈴鹿は、この鬼神の妻が自分の母であると語り、両者を引き合わせる。鈴鹿の母は俊宗をもてなし、酒宴を設ける。鈴鹿の母が酔いふれると、俊宗は鈴鹿に対し、鬼神が舅にあたる以上、退治することが憚られると語る。鈴鹿は、自分にとって鬼神は継父であるから問題ないと言い、鬼神は都へ攻め上げるための軍勢を得るため、浅間に行っていることを語る。また、鬼神を討つ由を母に語ると、母は夫と智との板挟みに葛藤するが、智に恥をかかせるわけにはいかないと決心し、夫を討てと言う。さらに、退治の際には天上へ帰るからと、別れの悲しみを晴らすために管絃の遊びを行う。</p>

<p>②⑦ 帰還した大嶽は田村が来ていることに怒り、その怒声に城壁が崩れ、両者が対峙する。田村が帝の命令で討伐に来たことを言うと、大嶽は帝の権威を笑い、戦いが始まる。田村が剣を投げると大嶽の眷属は全滅し、大嶽自身も追い詰められ、首を切られる。首は舞い上がり田村に落ち掛かるが、鈴鹿が田村に十枚の兜をかぶせたため、田村は無事であった。大嶽が食い破った兜に菌形が九つ残ったため、これが歟形の語源（九菌形）となった。</p>	<p>鬼神の帰還を知ったその妻は天井を蹴破って天に去る。帰還した鬼神は俊宗の来訪に気づかぬまま、管絃の音に誘われ門をくぐるが、俊宗らの待ち伏せに遭い、首を斬られる。首は舞い上がるが、多聞天の剣に恐れを成して危害を加えることができない。その間に眷属との戦いになり、さらに日本中のみならず天竺・震旦からも多くの鬼神が襲来するが、白山の夜叉鬼神が俊宗に敗れたことで鬼の軍勢は降参する。立山の鬼神の首も死んだため、灰にして捨てる。（歟形語源説なし）</p>
<p>②⑧ 田村は改めて鈴鹿と共に暮らすことを望むが、鈴鹿は定業による死期が迫っておりそれが叶わない旨を告げ、鈴鹿山へ戻る。田村は帰洛し多くの褒美を賜る。大嶽の首は宇治の宝蔵に収められ、大嘗会の大頭の起源となった。</p>	<p>鈴鹿は今後永く悪魔の出現しないことを語り、俊宗に都へ戻り天下を守護すべきことを言う。そして俊宗が九十七歳の時、鈴鹿山へ来るべきこと、その後は無量劫にわたって共に暮らそうと言う。俊宗は帰洛し多くの褒美を賜る。（大嶽の首の件なし。鈴鹿の死の予言なし）</p>
<p>②⑨ 田村は急ぎ鈴鹿山を訪れるが、鈴鹿は既に死んでいた。悲しむ田村に、死んだ鈴鹿の声が聞こえ、娘のことを託され、また、剣を譲り受ける。田村は悲しみのあまり思い死にす。冥途では田村の「思ひ（火）」により帝釈堂が炎上する。そこに田村が現れ、鈴鹿を返せと強要する。閻魔は別の女の死体に鈴鹿の魂を入れて蘇生させる。</p>	<p>（鈴鹿・田村の死および蘇生譚なし）</p>
<p>③① 田村・鈴鹿は末永く栄えた。</p>	<p>天下太平となる。俊宗は龍馬を馬頭観音と祝い、音羽山に堂を建ててこれが清水寺の田村堂である。その後、鈴鹿の言った通りに九十七歳で鈴鹿山に向かい、不老不死の薬によって若返り、無量劫の楽しみをうけ、天下を守った。子は都に上り、將軍の跡を継いだ。</p>
<p>③② 本地譚は諸本により大きな差があり、原態不明。具体的な本地譚を欠く諸本あり（小野本・万治本・天理写本）。</p>	<p>代々の天下の將軍は俊宗の再誕である。立烏帽子は鈴鹿権現であり、東海道守護神となった。日本は仏法神道が栄え、めでたき御代となった。</p>